

寮母は宝（1）

人間のみが晩年に介護を必要とする存在。しかし、この国ではそれを保障する所はわずかに特別養護老人ホームのみ。その中核が寮母職。任運荘は学習として全職員が手記を提出する。吉野美穂さんの「わたしと任運荘」の長文よりの抜き書き。

―事務職より老人施設へ転職しようとする、皆がおむつ換えやら悪臭のある悪い職場だととめた。一日机に付き人の儲けを計算して頂くお金と一日中身体を使って人のお世話が出来て頂くお金の違いがありそうだ。私は迷わなかった。

―夜勤。利用者さんが居ない！ 捜す。全身冷汗。…庭木をかき分けて…この仕事の大変さが分かった。…おむつ交換。「気持ちよく寝ちよんのに…いつまで開けちよんな…」。きつい言葉。自分の手順の悪さに涙する始末。

…最近「今何時な、ではしてもらおうかな」と。頑張ろうという気になる。もの言えぬBさんは両手を合わされる。…何とも言いようのない幸せな気分。私も両手を合わす。思いを込めて。

—一年前の皆さんの顔が今とは違う。皆優しいよい顔。何故そう見えるのか。たぶん私が皆さんへ少しだが近づいたからだろう。…寝たきりの方も手を握ると握り返す。言葉も大事だが触れることも大切。何よりもスキンシップ。子供たちに必要なように。

…こうして私の一年の節むすびが終わろうとしている。今だに小さな身体で廊下を走っている。この任運にんうんが好きだから。—

ああ、美しい自己変革と真の人生がそこにはある。

(一九九六年四月三日)